

No. 1141

コンピューター消防

119番の通報で出動する消防隊は1分、1秒を争う。過密都市の火災では尚更だ。横浜市消防局では全国にさきがけ、コンピューターによる自動指令通信システムを導入した。

119番の通報が入ると自動的に火災発生場所や火災規模に応じた消防車が選別され、災害地域の地図が大型スクリーンに写し出される仕組みで、適確な指令を行える。

119番を受けてから出動までの時間が短縮されるほか、大きな災害や同時多発のさい、大きな威力を発揮できるという。都市が巨大化、高層化するにつれ消防活動がむつかしくなり、あらためて、じん速さとの確さが問い直され、導入されたコンピューターシステム。横浜市だけでも日に平均3件の火災が発生し焼死者も100人を超した。これから年末にかけ、火災も増える時期、早期消火をめざしコンピューターシステムは活躍する。しかしこのコンピューターシステムが活躍しないですむよう日頃注意をしたいものだ。

ビルの谷間の分教場

ここは横浜市磯子区の公団住宅に作られた分教場ビルの谷間の教室で懸命にリズムを打つ子供たち。

根岸湾埋立工業地帯を持つ磯子区はここ数年、ベッドタウンとして高層住宅の建築ラッシュ。建築戸数はこれまでに約五千戸児童生徒の数もうなぎのぼりに増え続けている現在ある浜小学校など2校の小学校は飽和状態。人口急増と児童の通学問題に頭を痛めた市は当面の応急対策として団地内の分教場建設に踏みきった。

この分教場は国電磯子駅前の公団住宅一階にあり、昭和47年4月に開校した。子供たちのほとんどが団地の住人。始業ベルが鳴る頃エレベーターで一階に、遠距離通勤のパパたちを尻目にわずか30秒で学校に到着。

現在ここでは1～2年生、百人ほどが学んでいる。

分教場というのは木造で古いオルガンなんかが置かれているものだが、都会では金アミにコンクリート。16階建ての中庭は頭上に2重のアミが張られまた壁にはボンタイルのふきつけが施され子供たちを保護している。

児童の母親は「そうですね、やっぱり問題ですね」。

児童たち「私は2年7組〇〇です……」。

空に向ってそびえたつ巨大なビル。そこには冷めたいコンクリートと暗い風の通り路しかない。エレベーターでわずか30秒、ビルの谷間の分教場も子供たちにとっては以外に遠いのかも知れない。